

大谷學報 第二十三卷第二號

東林十八高賢傳の研究

松本文三郎

一
東晉時代廬山の慧遠が其同志一百二十三人と共に所謂白蓮社を結成した、其時の主なる人々の傳記と稱せらるゝ十八賢傳又は東林十八高賢傳（或は東林蓮社高賢傳ともいふ）なるものゝ存することは人の善く知るところである。所謂十八賢とは慧遠を首め支那僧の十人、佛陀耶舍、覺賢の外國僧二人と、劉程之等の隱士六人とであるが、今傳ふる所の書は十八賢傳と稱しながら、此等十八人の次に「百二十三人傳」と題し、曇翼以下の七人と、更らに「不入社諸賢傳」と題し陶潛以下三人の傳記をも附載する。此書は我邦にありては續藏經（第一輯第二編乙第八

東林十八高賢の研究

套第一冊）中に編入せられて居るが、これは宋の志磐の佛祖統紀（第二十六卷）に収録するところと同一本である。近代支那に傳はる所は明の陶珽重校の説郛（第五十七局）に編入せられた東林蓮社十八高賢傳であつて、唐宋叢書（別史）は說郛本に據り、王謨の增訂漢魏叢書はまた唐宋叢書本を採る、但王謨は篇末に彼自身の跋を附するが、此跋は我邦の續藏本にも轉載する。更に五朝小説（魏晉小説）にも此書を収録するが、これ亦重校說郛本に據つたものである。従つて此等は亦何れも同一本であり、前者（今姑らく續藏本と稱する）と後者（假りに說郛本と稱する）とは、其本文に於て多少文字の變異がない

でもないが、これは寧ろ誤寫誤植と見做すべきものであつて、大體に於ては全然一致するといつても差支ない。唯枝葉の部分に於て次の諸點が相異して居る。

(一)續藏本に載する篇中間の跋文の最後の一節「今歴考」以下の三十一字が說郭本にはない、而して其代りに「云」の一字を補ふ。

(二)右跋文は續藏本には十八賢の傳記の終、「百二十三人傳」の前に挿入するが、說郭本では之を「不入社諸賢傳」の終、即ち一篇の最後に置く。

(三)說郭本では本篇の著者を「晉闕名撰」とするが、續藏本には此文字はない。

(四)又續藏本では本篇の題目を單に十八賢傳又は東林十八高賢傳と稱するが、說郭本では東林蓮社十八高賢傳となし、蓮社の二字を添加する。

此等は何れも内容に關係ない微細な相違に過ぎぬが、しかし本篇を書志學的に研究するに當つては何れも頗る重要な價值を有することを認めなければならぬ。

先づ第一に考ふべきことは跋文挿入の地位である。若

し十八賢傳が始めから今見るやうな形に編纂されたものとすれば、續藏本に於けるが如き一篇の中間に跋を附することは極めて其當を得ないのは言ふ迄もない、而して說郭本は其體裁に於て宜しきを得たものといはなければならぬ。しかし篇末に存すべき跋を後人が之を篇の中間に挿入すべき何等理由の存せないことも明らかである。

若し果して然りとすれば宛も法華經の囑累品が本と經の中間に存したのを後人が之を經末に移したと同様に、十八賢傳の跋も本來一篇の中間に存したのを跋の性質上篇末にあるべきものといふ一般の通念により、之を一篇の最後に移したと考ふべきではなからうか。若し又さうであるとすれば續藏本の形式が說郭本より一層古いものであり、說郭本は之に修正を加へたものと斷定せなければならぬ。而して之と同時に十八賢傳なるもの、本來の形は其名稱の如く十八人の傳記が其全内容を成し、跋以下の「百二十三人傳」と「不入社諸賢傳」とは後世學者の之を増益したことも秋毫疑を容れざることとなる。而して此事は次の跋文の内容を研究することによつて一層明瞭とな

るのである。

續藏本に載する跋には次の如くいふ。

十八賢傳、始不著作者名、疑自昔出于廬山耳。熙寧間嘉禾賢良陳令舉舜俞加刊正。大觀初沙門懷悟以事迹疎略、復爲詳補。今歷考廬山集、高僧傳及晉宋史、依悟本再爲補治、一事不遺、自茲可爲定本矣。

是れに由つて之を觀れば作者不明の十八賢傳なるもの、遅くも宋以前既に存したことは疑を容れないが、宋の熙寧年間に至り陳舜俞なるもの之に修正を加へ、更に百年ならずして懷悟なるもの第二回に増補する所があつた。

尙最後に此跋の作者は三たび廬山集や高僧傳其他晉宋史に據り之を補治し今の形をなしたものであることが知らるゝのである。唯續藏本にあつては此第三回の修補が何時何人によつてなされたか明らかならぬのは甚だ遺憾である。續藏本に載する黃汝亨の序文によると

此傳刻在廬山、未獲流布、樂愚上人謀新業于棲賢山中、尋授吳門毗耶室梓行、予故喜而序之。

とある。或は此守愚上人なるものが之を修補し梓行せし

めたのかも知れぬ。が守愚上人の何時如何なる人物であるかは全然知るを得ない。しかし又續藏本が若し佛祖統記によつて刊行せられたものと思はれる。或はこれが正纂の時に此跋を記したものと思はれる。或はこれが正當な見解かも知れぬ。若し果して然りとすれば統記は咸淳五年に成れるのであるから、第二回懷悟の修補以後、

約一百六十年を過ぎ、第三回の修補が出来たことゝなる。又此第二回第三回には如何なる程度に舊本を修補したか、明らかならぬのも甚だ遺憾である。所が十八賢傳の説郛本には前にも一言した如く跋の最後の「今歷考」以下の文字がなく、其前の「復爲詳補云」で終つて居るので、其文面から見れば、此本は第一回と第二回との修補がなされたのみで、第三回の修補以前の本であるが如くである。即ち説郛本が更らに變じて續藏本となつたものゝやうでもあるが、これ亦甚だしく疑はしいのである。今試みに此兩本を採つて之を比較すれば、前にも述べた如く全篇殆んど全く一致するので、説郛本から續藏本が出来たとは考へられない。元來說郛編入の諸書は編

纂者の私意によつて恣に之を節略するのが其例であるが、十八賢傳は幸ひに其本文に於ては節略を受けなかつたが、此跋の末段は何時何人の所爲であるか極めて不明である所から、此一節の文を削除したものと推測せらるゝのである。若しまた然りとすれば說郛本は如何にも第二回修正本であるが如く思はるゝが、實は第三回修正本に就き更らに變改を加えたもので、實はこれは第四回の修正本であるとも稱すべきである。

尙序に跋文に見ゆる廬山集に就き一言して置く。高僧傳(卷六)慧遠傳の末には

所著論序銘贊詩書集爲十卷、五十餘篇、見重於世。とあるが、其集を何といつたか明らかでない。隋書經籍

志には晉沙門釋惠遠集十二卷を、新舊唐書には沙門惠遠集十五卷を著録する。が十八賢傳の慧遠傳には廬山集と號したとある。陳舜俞の廬山記(此書に就いては後に説く)には「遠公匡山集」の語が見えて居り、匡山とは廬山のことであるから、遠公の詩文集は之を慧遠集とも又廬山集とか匡山集とかともいつたものであらう。しかしな

がら、跋文にいふ廬山集とは彼と全然同一本ではないらしい、今廬山集なるものは傳はつて居ないが、現行本十八賢傳には屢此書名が擧げられ劉程之傳の終には

廬山集載感應事迹甚詳

といひ、又慧恭傳の終にも

廬山集有恭道人臨終感應事

等ともある。のみならず佛祖統記(卷二十六)には「以下二人見廬山集」といひ、此に慧然法師と曇威法師二人の名を擧げ、又「此以下十一人見廬山集」といひ、此に孟懷玉、王喬之等十一人の名を擧げて居る。元來慧遠の廬山集は彼の自から作つた經論の序や銘贊詩記を載したものであることは高僧傳のいふところによつて明らかである。然るに劉遣民や慧恭等の感應の事迹や其他僧俗の傳記か逸話などを述ぶる如きは到底あり得ないこと、信する。恐らく後世慧遠の廬山集と別にか、或は之に斯かる白蓮社關係の人々の事迹を附記したものが編纂されたのであらう。従つて慧遠の廬山集は十卷(或は十二卷又は十五卷ともいふ)であつたのに、此は二十卷本であつた

らしい。而して斯かる書の唐代既に存したことは廬山記に

匡山集亦二十卷景福二年重寫

ともいふ。景福二年は西紀八九三年であり、唐末昭宗時代である。乃ち二十卷本の廬山集の遅くも八百年代既に世に現はれたことを知るべきである。

附記 ① 慧遠の廬山記略(守山閣叢書本に據る)には「有匡裕先生者、出自殷周之際、遁世隱時、潛居其(山)下、或云裕受道於仙人、共遊此山、遂託室崖岫、卽巖成館、時人謂其所止、爲神、仙之廬、因以名山焉」とある、これが廬山の名の因つて生じた所以であるといふ。而して匡山といふのも亦此匡裕の名によるものである。此事は陳舜俞の廬山記の初にも慧遠の言を引き之を説く。尙慧遠の廬山記略なるものは廬山集中にも編入せられ、又石に刻して東林寺境内に建てられたことは陳氏廬山記に述ぶる所である。

二

十八賢傳の原本既に知るを得ず、第二回第三回修補の程度亦判明せないが、幸ひに第一回陳舜俞改修本の今に存するにより、溯つては其原本の如何なるものであつたか、又第二回以後如何様に改變せられたかの一斑を髣髴

として推測し得るのである。但陳氏の改修本十八賢傳なるものは彼が一篇の單行本として出版したものではなく、彼の著はした廬山記^②なるものゝ一篇として之に挿入したのである。廬山記の編述に關しては劉渙の同書序文に次の如くいふ。

熙寧中會陳令舉以言事斥、於是乎山林之嗜既同、相與乘黃犢往來山間、歲月之積、遂得窮探極觀、無所不究、令舉乃採余所錄、及古今之所記、耆舊之所傳、與夫耳目之所經見、類而以次之、爲記其詳。

陳氏の官を廢められたのは熙寧の五年であり、それから山前に家居し、同好の士劉渙と共に親しく廬山を跋涉し、此記を作つたのである。で同李常の序にも

其〔廬山〕高下廣狹、山石水泉、與夫浮屠老子之宮廟、逸人達士之居舍、廢興盛衰、碑刻詩什、莫不畢載、又作俯視之圖、紀尋山先後之次、泓泉塊石、無使遺者、成書凡五卷。

ともいふ。後世廬山記としてはこれが最も精細確實なるものと稱せらる。で四庫全書提要(卷七十)にも「北宋地

志傳世者稀、此書考据精核、尤非後來廬山紀勝諸書所及、と賞讃して居る。序には俯視の圖をも作つたとあるが、遺憾ながら今此圖は傳はらぬ。而して支那の地志には各其地方の名所舊蹟を叙すると共に、古來其地方に於ける有名なる人物の名稱傳記をも附記するのが常である。で、陳氏も偶々古より東林寺に傳はつた十八賢傳なるものがあつたので、之を取つて廬山記中に編入したのである。

十八賢傳を廬山記中に編入するに當り陳氏は次の如くいつて居る、これは原本十八賢傳の一般性質を知らしむる點に於て吾人の大に注意を要する文字である。

廬山豈獨水石能冠天下、由代有高賢隱居以傳、東林寺舊有十八賢傳、不知何人所作、文字淺近、以事驗諸前史、往々乖謬、讀者陋之、使古人風跡用無知者、惜哉。予既作山記、乃因舊本參質晉宋史及高僧傳、粗加刊正、或舊所脫略、今無有可考亦未如之何。

舊本十八賢傳の文字淺近であり、史實が乖謬し讀者之を陋としたとすれば、其無學なる僧徒の作るところであつ

たことも容易に推測し得らるゝ。これが或は此書の隋唐經籍志に著録せられなかつた所以であつたかも知れぬ。

然らば陳氏の改修に成れる十八賢傳と現行本とは如何なる點に於て異なるかといふに、

(一) 陳氏十八賢傳に叙する所は現行本の慧遠法師より雷次宗に至る人々の傳記のみであつて、「百二十三人傳」や「不入社諸賢傳」は一切之を闕く。

(二) 其叙述の順序亦全く現行本と相異する。

(三) 各傳の文章亦頗る改變せられ、現行本にあつては全然陳氏本にあらざる事實を増益する。

此等が此兩者の最も主なる相異の點であらうと思ふ。

此書が本來十八賢傳と稱する所を以て見ても、十八人のみの傳記を述べたものであることは容易に推測し得らるゝのであり、現行本の如き合計二十八人の傳記を挙げながら之を十八賢(或は高賢)傳と稱するは不合理の甚しいものである。陳氏が「舊有十八賢傳」といふ所を以て見れば、陳氏以前の本も十八人で終つて居たに相違ない。之を現行本の如く増補したのは果して何人であつたか明

らかにし得ないが、彼の跋文に懷悟が詳補をなしたといひ、更らに第三回の改修の時には悟の本に依り再び補治をなしたといふ點から考へると、此増益は大體懷悟によりなされたものではなからうか。但第三回の修補の時に更らに一二編入したものがなかつたとはいへぬ。

次に陳氏の擧ぐる傳記の題目及び順序は次の如くである。(括弧内は現行本の題目と其順次である)

- | | | |
|------|----------|-------------|
| (一) | 社主遠法師 | (慧遠法師 一) |
| (二) | 彭城劉遺民 | (劉程之 十三) |
| (三) | 豫章雷次宗 | (雷次宗 十八) |
| (四) | 雁門周續之 | (周續之 十五) |
| (五) | 南陽宗炳 | (宗炳 十七) |
| (六) | 南陽張野 | (張野 十四) |
| (七) | 南陽張詮 | (張詮 十六) |
| (八) | 西林覺寂大師 | (慧永法師 二) |
| (九) | 東林普濟大師 | (道生法師 四) |
| (十) | 釋慧持法師 | (慧持法師 三) |
| (十一) | 剡賓佛跋耶舍尊者 | (佛跋耶舍尊者 十一) |

- | | | |
|------|----------|-------------|
| (十二) | 剡賓佛跋陀羅尊者 | (佛跋陀羅尊者 十二) |
| (十三) | 釋慧叡法師 | (僧叡法師 六) |
| (十四) | 釋曇順法師 | (曇順法師 五) |
| (十五) | 釋曇恒法師 | (曇恒法師 七) |
| (十六) | 釋道昞法師 | (道昞法師 八) |
| (十七) | 釋道敬法師 | (道敬法師 十) |
| (十八) | 釋曇詵法師 | (曇詵法師 九) |

之を要するに舊本は俗人を初とし僧侶を後に列したので新本では之を反對に列したのであり、其間の先後は如何なる標準に據つたか不明である。人名に於ては慧叡が僧叡と變ぜられて居るのは注意すべきである。

文章字句の變異に至つては今一々之を掲ぐるの煩に堪えない、又假令ひ文字が増減し、文章が前後されても其内に於て大なる變化ないものは之を列擧する要もない。が時あつては其内容に可なるの變化あり、増益さるゝものもないではない。で今此には便宜其代表的の一例として曇詵傳を擧げ、之によつて其一斑を知らしむることとする。

現行本

曇詵法師

法師曇詵、廣陵人、幼從遠公出家、勤修淨業、兼善講說、註維摩經行于世、常著窮通論以明宿修、述蓮社錄以記往生、又能別識鳥獸毛色俊鈍之性、洞曉艸木枝幹甘苦之味、妙盡其理、人知其有密證云、元嘉十七年集衆謂曰、自建寺以來至此五十年、吾之西行、最在其後、卽跣念佛百聲、閉息遂絕、春秋八十。

陳氏本

釋曇詵法師

曇詵廣陵人、幼而出家、爲遠公弟子、頗通外學、別識山中鳥獸毛色俊鈍之性、洞曉草木枝幹善惡甘苦之味、尤能講說、風神超朗、氣岸灑遠、審於傳寫、持本不移、注維摩經、著窮通論、蓮社錄、建寺後五十五年、以元嘉十七年庚辰、最後終、春秋七十九。

卽ち現行本に於ける「以明宿修」とか「以記往生」とか、

又、妙盡其理、人知其有密證云」等の語は、云はゞ註釋の文であつて別に新たななる事實を述べたものではない。又

現行本は陳氏本の「風神超朗」以下十六字を削除して居るが、これも大なる關係を有するものともいへない、が建寺の後五十五年が五十年となり、春秋七十九が八十であるのは、事實の是非は兎に角、頗る相異なりといはなければならぬ。果して何に據つて斯く變改したのであらうか。更らに陳本の「頗通外學」の一句が新本では削除せられ、之に代はるに「勤修淨業」の四字を以て、最後の「卽跣念佛百聲、閉息遂絶」の二句が新たに増益せられて居る。曇詵が遠公の弟子であり、又白蓮社の一員であつたとすれば淨業を修したといふ一句は後人の想像に出たものではあらうが、事實に於て必らずしも誤れりとはいへないかも知れぬが、後の念佛百聲云々の言に至つては人をして宛も慧遠の念佛が唱名の念佛であつたかの如き疑を生ぜしめ、事實に於ては甚だしく相違した記述であるといはなければならぬ。斯の如き無用有害な増補の文字は他にも屢々發見せられるのである。例へば曇恒傳の終に

端坐合掌、勵聲念佛而化

といひ、道炳傳にも
集衆念佛就座而化

といひ、道敬傳にも

即端坐唱佛而化

等といふが如きである、而して此等の文字は何れも陳本には秋毫存せざる所である。乃ち現行本の改修者は慧遠の念佛をも唐代の念佛と全然同一視したのであらう。要するに現行本は此等の點に於ては全然資料とするに足らざるものである。

附記 ② 廬山記は五卷八篇より成り、卷一、摠叙山水篇第一。叙山北第二。卷二、叙山南篇第三。卷三、山行易覽第四。十八賢傳第五。卷四、古人留題篇第六。卷五、古碑目第七。古人題名篇第八といふ。此書は我邦にあつては元祿十年に三冊本として出版され、これには多少の脱文はあるが現存する最も具足した本である。支那にあつては早く失はれたと見へ、羅振玉氏は此元祿本を殷禮在斯堂叢書中に編入復刻する。又羅氏は吉石翁叢書第二集に德富氏藏廬山記を影寫編入する。此德富本は、第二、第三卷は宋本の殘闕であり、第一と第四、第五の三卷は日本に於ける古寫本である。これは現存する最善本であるが遺憾ながら處々毀損する所

東林十八高賢の研究

があり、元祿本に對照せなければ全部通讀し難い。其他守山閣叢書(史部)にも廬山記が編入されてあるが、これは前三篇のみであり(四庫全書本も同様のやうである)十八賢傳等は之を闕く。

三

說郛系の諸本が十八賢傳を以て「晉闕名撰」となすもの亦甚だ理由なきことであり。掲ぐる所の十八人の中道生、曇順、僧叡、道炳、曇詵、道敬と俗人にあつても宗炳、雷次宗、乃至佛陀跋陀羅の九人、即ち其半數は何れも劉宋時代に卒した、特に雷次宗の如きは元嘉の二十五年、歲六十二を以て終つたといふのであるから、寧ろ其後半生は宋代にあつたといはなければならぬ、従つて彼は晉人といふよりも宋人ともいふべきである。而して十八賢傳には何れも此等人々の歿年をも記してあつたのであるから、晉人の之を作り得る筈はない。且隋唐諸志にも此書を著録して居ないのであるから、果してそれが何時代に作られたかは全然不明である。陳氏の叙にも唯宋代東林寺に舊十八賢傳があつたといひ、十八賢傳の跋にも

疑らくは昔より廬山に出づるのみといふ。王謨が之を漢魏叢書中に採録するに當り

然此十八高賢、皆晉宋時人、則此傳亦當爲晉宋時書

といふも、晉宋人の傳は晉宋人にあらざれば作れない筈もないから、此推論は人をして甚だしく根據の薄弱なるを感じしむるのである。しかし陳舜俞が此書を作つたのではないから、遅くて趙宋以前既に其書の存したことは疑を容れないのみならず、十八賢なる名稱は恐らく此十八賢傳なるものが作られてから後に起つたものと推測せらるゝが、陳氏の廬山記に

新羅岳東二里、有十八賢臺、平廣可坐十餘人、十八賢謂自慧遠法師已下十八人者

ともあり、宋代には既に十八賢臺なる舊蹟まで附會捏造せられて居たやうである。斯かる傳説が一般民間に流布せらるゝには相當の歲月が經過して居たに相違ない。尙ほ同書(卷四)には白居易の「春遊二林寺」と題する詩が擧げてあるが、其中

綯彼十八賢 古今同此適

の句がある。して見れば十八賢の名稱は白樂天時代若くは唐の中葉頃迄には既に人の唱ふる所であつたらしい、從つて十八賢傳もそれ以前に存在したと推測して差支なからう。

復次に說郛系の諸本が何れも蓮社高賢傳又は東林蓮社高賢傳となし、蓮社の二字を其題目に添加したのは云ふまでもなく、此等十八人を以て白蓮社の主要な人物と見做したからである。陳氏の廬山記の如きも

遠公與慧永、慧持、曇順、曇恒、竺道生、慧叡、道敬、道昞、曇詵白衣、張野、宗炳、劉遺民、張詮、周續之、雷次宗、梵僧佛馱耶舍、佛馱跋陀羅十八人者、同修淨土之法、因號白蓮社。

といひ、此等十八人を白蓮社の同志と認めて居りながら、此書(篇)の題目としては單に十八賢傳となし、其叙にも同じく東林寺舊に十八賢傳ありといふ。之によつて考ふるに舊本は元と十八賢傳と題し、蓮社の二字は題目中になかつたものと思ふ。若し果して蓮社の二字のないのが舊題名であつたとすれば、此書の原作者は蓮社の同

志として主なるもの十八人を擧げたのではなく、嘗て廬山に居住した、或は東林寺に出入し慧遠と直接間接交際のあつたものゝ中、高賢の士十八人を選び、其傳を記したのではなからうか、勿論此場合に於ても蓮社の同志が多く其中に入るのは敢て怪しむに足らぬが、必らずしも其悉くが蓮社の同志とは限らぬことゝなる。しかるに後世では東林寺に其書のあつたことや、又其中蓮社同志のものも多く擧げられて居ることから、遂にその全部が總べて蓮社中の人物と誤解せらるゝに至つたのではなからうか。而してその誤解が本となつて、其書名にまで特に蓮社の二字を加え、何等怪まなくなつたのであらう。

今若し此書をして蓮社の同志を傳へたものとすれば、吾人の一見最も奇怪に感ずるのは二人の梵僧覺賢と耶舎とを其中に列することである。覺賢は羅什の徒により長安を擧出せられてから、廬山に來り、慧遠の歡迎する所となり、此に彼の爲め達摩多羅禪經を譯出したことは人の能く知るところである。しかし彼が西方の欣求者であつたといふことは高僧傳にも一言説及んでない。元來彼

は彌賓に學んだものであり、彌賓は當時小乘國であつたから、彼の此に修習した禪も亦小乘禪であつた。彼が慧遠の爲めに譯した禪經も亦能く之を證するものである。のみならず彼が姚秦の太子泓の求めにより羅什と問答する所を以て見ても、其小乘學者であつたことは秋毫疑を容れない。後彼は道場寺に於て華嚴を翻譯したが、其原本は彼の將來したものではなく、慧遠が先きに梵本を西域に索めしめた時、支領が于闐から將來したのであり、覺賢は梵語に通達して居たから之を譯出したに過ぎぬ。彼は安養淨土の欣求者といふよりも、寧ろ彌勒信仰者であつたのではなからうかとも思はるゝ點がないでもない。高僧傳(卷二、佛駄跋陀羅傳)には彼が彌賓に遊學中其同友達多なるもの、彼の才の明に伏したが、未だ其人を測り得なかつた。達多が

後於密室閉戶坐禪、忽見賢來、驚問何來、答云、暫○至兜率致敬彌勒、言訖便隱、達多知是聖人。

ともある。十八賢傳にも覺賢が長安を去つてから

後○至廬山、遠師久服風聞、傾蓋如舊遠師以下の十字現行本之を削る於

香谷後山菱舎而居

といふのみで、餘は高僧傳と大體相同じく、蓮社との關係は一言も説及ばぬ。飛錫の念佛三昧寶王論（高聲念佛面向西方門）には「晋廬山遠法師從佛陀跋陀羅授念佛三昧」とあるが、これは全然事實を誤つたものである。又現行本の十八高賢傳の跋陀羅傳の終には「念佛而化」とあるが、是れも後人の妄りに補ふところであつて、陳氏本には全然有らざる所である。現行本の斯かる文字を補ふたのは之によつて幾分たりとも蓮社との關係を結ばしめんとしたに外ならぬ。

次に佛陀耶舎に至つては尙一層奇怪である。耶舎も蘭賓の人で、小乗の學者であり、覺賢の禪に於けるが如く、彼は毗婆沙の専門家であつた。で高僧傳（卷二佛陀耶舎傳）にも

舎爲人赤鬚、善解毗婆沙、時人號曰赤鬚毗婆沙、既爲羅什之師、亦稱大毗婆沙。

とある。而して高僧傳はいふを俟たず、十八賢傳に於ても彼の西方欣求者たることは一言も説及ばぬ。彼は支那

に於て入滅せず、後本國に還つたものであるから、覺賢の場合の如く「念佛而化」とも言ひ得なかつたのであらう。が陳氏本十八賢傳には

晋義熙八年王子入廬山爲遠公預社之客、後辭還本國といひ、現行本にて

義熙八年來廬山入社、後辭還本國

とある。が高僧傳には耶舎が廬山に行つたことは秋毫も之を記すところなく、果して是れが事實であつたか否かは甚だ疑はしい。のみならず開元錄（卷四）に據れば耶舎は

長阿含經二十二卷 弘始十四年出、至十五年訖

とある。若し之をして事實であるとすれば、弘始の十四年、十五年は東晋の義熙八年、九年に相當し、彼が翻譯に最も多忙な年であつたに相違ない。その最も多忙を極めた時代に、遠く南方廬山にまで優遊すべき筈はないやうに考へられる。是れに由つて之を觀れば耶舎が廬山に行つたといふことが既に疑問であり、又假令ひ寸暇を得て之に至つたことがあつたとしても、蓮社に加盟すべき

答もない。これは全然信するに足らざるものである。十八賢傳原著者の無學なる、或は高僧傳等に

後有罽賓沙門僧伽提婆、博識衆典、以晋太元十六年末至溽陽、遠請重譯阿毗曇心及三法度論、於是二學乃興。

とある僧伽提婆も同じく罽賓國人でもあり、又論部の學者でもある所から、之を佛馱耶舎と混同したのではなからうか。何れにしても耶舎を此書に擧ぐるのは吾人の到底解し得ないところである。

人或は耶舎と提婆と全然異なつた二人を混同したといふが如きは餘りに苛酷の論であると考へるかも知れぬが、これは必ずしもさうではなく、他にも其例がある。

僧叡法師傳(舊本慧叡傳)は其一例である。現行本十八賢傳の僧叡傳には叡が天竺諸國を歴游し後關中に至り羅什に従ひ經義を諮稟したといひ、之に次ぎ

羅什翻法華經、以竺法護本云、天見人、人見天、什曰以此言過實耳、叡曰、將非人天交接、兩得相見、什喜、遂用其文。

といふ話を載する。が今之を高僧傳に對照するに此羅什

譯場の話のみは僧叡に關することであるが、其前文の天竺諸國に歴游したとか、又其後の京師烏衣寺に至つたとか、乃至彭城の王義康との話の如きは、何れも慧叡のことである。僧叡は魏郡長樂の人であり、六十七歳を以て没して居り、慧叡は十八賢傳にいふが如く冀州の人で、歳八十五を以て元嘉中に卒した。乃ち現行本十八賢傳は慧叡と僧叡とを全然混同し一人となしたことを知るべきである。陳氏本十八賢傳には羅什との問答の一段はなく(これは第二回改修以後高僧傳により増補したものである)又其題名も「釋慧叡法師」とある、此點は現行本に比し正しいのであるが、其傳の終りに

時稱晋有四聖、生肇融叡其一也、

とあり。卽道生、僧肇、道融と並び稱せられ、羅什門下の四聖といはれたものは實は僧叡であつて、慧叡ではないのである。即ち二人の混同は既に舊本から存したので、新本に至つて愈々甚しく改惡されたものである。尙現行本僧叡傳の終に叡が臨終の時衆に告げていふ

吾將行矣、卽面西合掌而亡

1

とあるのも、これは僧叡のことで慧叡のことではない。若し念佛の行者といふ點からいへば、僧叡が正しく之に當るのであるが、彼は廬山にあつて之を修したものである。若し又廬山に住した點からいへば、慧叡を擧ぐるのが穩當であるが、彼は念佛の行者ではないらしい。陳本には慧叡が天竺諸國を歴遊してから、「還憩廬山、入遠師淨社」といひ、現行本には「來入廬山、依遠公修淨業」といふが、高僧傳には「還憩廬山」とあるだけで果して蓮社に入つたものか否明らかでない。但舊本十八賢傳が廬山に居住した名士を擧げたものとすれば慧叡を其中に加ふることは決して不當ではない。支那高僧の間にすらも斯かる混同があつたとすれば、外國人を互ひに混同する如きは亦必らずしも怪しむに足らぬ。

最後に道生に就いて一言する、道生も廬山とは密接な關係を有するものである。で高僧傳にも

初入廬山幽棲七年、以求其志、常以入道之要、慧解爲

本、故鑽仰群經、斟酌雜論、萬里隨法、不憚疲苦

ともいひ、後長安に至つたが又南京に還り彼の有名な闡

提成佛の説を倡えてから、衆僧の排斥を受け、廬山の精舎に迹を消し、遂に此に卒したのである。而して彼の墳墓も廬山の阜に造られた。斯く廬山とは一生離るべからざる關係を有したのであるから、此點より十八賢傳の一に加ふるのは最も謂れあることである。しかしながら彼を以て蓮社の一員となすことは何等の理由もない。彼は嘗て「佛無淨土論」を作つたともいはるゝのであるから、西方願生者とは到底考へ得られないのである。で十八賢傳にも彼の傳のみは一言も蓮社のことをいはず、又「念佛而化」等の常套語をも挿入せぬ、又之を挿入すべき餘地がなかつたのであらう。序にいふ陳本には道生傳の題目を東林普濟大師となすが、彼の居住した寺は高僧傳に據れば青園寺といふ、此寺は晉の恭思皇后褚氏の建つる所であり、後に其名を龍光と改めた、而して彼の没したのも此寺に於てであつた。若し然りとすれば東林と稱するのは全く誤であるやうに思はれる。

以上論ずるところによつて之を見れば所謂十八賢なるものは必らずしも皆白蓮社一味のものとはいはれないの

である。勿論廬山の佛教にあつては慧遠の一派が最も盛大であり、人材亦多く此に集まつて居たのであるから、勢自から蓮社關係のもの、多く其撰に入るのは當然である。が、兎に角舊本の十八賢とは蓮社中より之を撰出したのでなく、嘗て廬山に居住した高士の中から十八人を採擇したに外ならぬと解すべきである。勿論其撰擇が果して當を得たか否は疑問であり、例之へば十八人中の道暉の如きは高僧傳にも著録せられず、十八賢傳には彼は遠公の席を紹いだともいふが、其性行の殆んど全く後に傳はらない人物である。之に反し僧濟の如きは廬山に來り學び慧遠も大に望を囑し「大法を紹隆するは爾其人乎」といつたとも傳ふるに、十八人中には採擇せられず、後世百二十三人傳中に補はれた如きである。

斯く舊本十八賢傳は、其撰擇の適否は姑らく置き、其範圍を廣く廬山一山に採つたに關はらず、後の學者は之を誤解し、唯東林蓮社の一味とのみ考へ之に修飾を施したので、頗る奇怪不合理なものとなつたのである。

四

前諸節に於て略舊本十八賢傳の一般性質並びに現行本蓮社十八高賢傳の由來を説き了つた。之を要するに

(一) 舊本十八賢傳は其名稱の如く廬山に居住した、若くは東林寺慧遠と往來した賢者十八人を撰び、其略傳を記すを以て目的としたもので、直接蓮社とは關係なく、白蓮社中の人のみから之を採つたのではない。が白蓮社は當時人材の淵藪であつたから、同社中の人物の多く撰拔せられたのは自然の數である。但其撰拔の如何なる標準に依つたかは明らかならぬが、必らずしも皆其當を得たとは考へられぬ。

(二) 舊本十八賢傳は頗る無學の徒の手に成つたものと見え、文字、淺近、史實乖謬するものも少くなかつたりしい。一度宋代陳舜俞によつて訂正されたが、尙處々事實の混同を免れぬ。陳氏は學者ではあつたが、佛教には餘り通じて居なかつたが爲めであらう。

(三) 此書が何時何人の手に成れるかは明らかでない、その晉人の作と稱するが如きは、全然根據のない説である。が遅くも唐の中葉頃には既に存したものと思はれ

る。

(四)現行本は陳氏以後尙大體二回の修正増補を経たものであるが、その陳氏の第一回修正本は今同氏の廬山記に見ることを得る。

(五)現行本「百二十三人傳」と最後の「不入社諸賢傳」とは何時増補せられたかは明確に判らぬが、此時は既に舊本制作の動機を誤解し、之を以て蓮社同人の傳記を見做したことは疑ない。従つて本來蓮社と直接關係ない人々にまで何等か之と密接な關係を有せしむるが爲め、「臨終念佛而化」等の如き文句を挿入し、事實を曲筆することとなつた。

以上の理由によつて現行本蓮社高賢傳なるものは、佛敎資料としては殆んど其價值を認め得ないのである。

尙本篇を終るに望み序を以て一二の附記すべきことがある。陸脩靜傳は即ち其一である。

現行本十八高賢傳の「百二十三人傳」の終に、陸脩靜の小傳を載する。彼が劉宋時代に於ける有名な道家であつたことは人の能く知るところである。而して彼も嘗ては

廬山に居住し、又其遺骨も弟子によつて廬山に齎らされ此に葬つたのであるから、舊本十八賢傳ならば之を其中に加ふる亦必らずしも全然故なしとはせない。しかしながら現行本のやうに白蓮社の百二十三人中の一人として之を擧ぐるが如きは、妄も亦甚しといはなければならぬ。彼は廬山にこそ關係あれ白蓮社とは秋毫の關係も有せないのである、また關係すべき筈もないのである。これは全く彼の虎溪三笑といふが如き俗説によつて誤られた爲めであることは其傳中述ぶるところを見ても容易に知ることが出来る。彼の虎溪三笑の話の如きは逸話としては頗る興味深いものであるから、後世畫家の好んで畫くところとなつたが、全然根據のない妄説に外ならぬ。彼の死は十八高賢傳には宋の泰始三年としてあるが、何に据つたか判らぬ。其注に「雲笈七籤本傳云元徽五年化」とあるのが事實らしい。而して時に春秋七十二である。若し果して然りとすれば彼は東晉義熙二年の出生であり、慧遠の没した時（此には古來二説あつて或は義熙十二年とし、或は十三年とするが、今假りに十三年説を取

るとしても) 僅かに二十歳を出たばかりの弱輩であり、慧遠此時八十四歳、陶淵明亦五十三歳である、如何んぞ此等先輩と互ひに對等の交をなすことを得べきであらう。しかし此話も唐末か宋初に創作せられたものらしく、陳氏の廬山記にも現はれて居る。同書にはいふ、

流泉匝寺〔東林〕下入虎溪、昔遠師送客過此、虎輒號鳴、故名焉、時陶之亮居栗里、山南陸脩靜亦有道之士、遠師嘗送此二人、與語道合、不覺過之、因相與大笑、今世傳三笑圖、蓋起於此。

而して元豐庚申の歲(二年)には李龍眠が陳本十八賢傳により其圖を描くが、陸氏は道服を着、白鬚長く垂れた狀を現はして居る、當時には既に陸氏をも相當な老年の翁と老へて居たのであらう。^③のみならず九江府志によれば宋大明五年〔陸脩靜〕始來居廬山、明帝時召至建業、立崇虛館以居之、……脩靜固求還山、不許、頃之卒。とあり、又陳氏廬山記にも

太虛簡寂觀……宋陸〔脩靜〕先生之隱居也、……大明五年始置館廬山、泰始三年明帝復加詔命……屬辭不獲、

乃至闕、設崇虛館通仙堂以待之、……永徽初啓求還山、不許、五年三月二日即化。

ともいふ。陸脩靜の始めて廬山に來た大明五年とは宋の孝武帝の時で、義熙十三年慧遠の没してから既に四十五年を経た後である。而して陶淵明も元嘉四年歳六十三を以て卒して居るのであるから、淵明の卒後三十五年を過ぎて居る。虎溪三笑の話の妄誕にして一場の小説たる秋毫疑を容れないのである。後世の十八高賢傳(恐らく懷悟本)が斯かる妄説に據り、而も又之を蓮社百二十三人中に入るゝは、實に妄に重ぬるに妄を以てしたものといふべきである。但此小説を創作するに當つても固より多少の資料となるべきものがないでもない。高僧傳に自〔慧〕遠卜居廬阜三十餘年、影不出山、迹不入俗、每送客遊履常以虎溪爲界焉。

といふのが其資料の一となつたことは言ふまでもない。次には南史(卷七十五)周續之の傳に

〔周續之〕詣嘗受業、居學數年、通五經五緯、號曰十經、名冠同門、稱爲顏子、既而閑居、讀老易、入廬山事

沙門釋慧遠、時彭城劉遺民、遁迹廬山、陶深明亦不應徵命、謂之尋陽三隱。

とあるのが第二の而してその主なる資料となつたのであらう。此には周續之と劉遺民と陶淵明とを以て三隱となしたのであるが、三笑の話は之によつて更らに其人物を大にし、且つ之をして儒佛道の三教を代表せしむるに至つたのである。

次に高僧傳慧遠傳には慧遠の東林寺の結構成るや謹律息心之士、絕塵清信之賓、並不期而至、望風遙集、彭城劉遺民、豫章雷次宗、雁門周續之、新蔡畢穎之、南陽宗炳、張榮民、季碩、並棄世遺榮、依遠遊止。

とあり、出三藏記集(卷十五)の慧遠傳にも殆んど之と同様のことを記すが此には劉遺民、周續之、畢穎之、宗炳の四人の名を擧げる。又文唐の法琳の辨正論(卷三)には

晉彭城侯劉遺民 撰五時教、著九想詩、
晉豫章太守雷次宗 精心慕法、造棲靈寺、

晉臨淮令周續之 服道日新、
晉新蔡侯畢穎之 心期淨域、

晉南陽長宗炳之(之字符) 加事懇苦、
右五賢謝朓遺榮、策名神府、從遠師遊憩、意志隱淪、
等布一心、俱履幽極。

等といひ、此等五人を以て五賢とも稱し、均しく慧遠に就き學んだことを明かしてある。然るに十八賢傳には如何なる故にか、畢穎之一人を脱し之を擧げて居ない。辨正論が彼を以て五賢の一人ともなすを以て見れば、其尋常の材にあらざるはいふ迄もなく、又「心淨域を期す」とも注するのであるから、其熱心な蓮社の一員であつたことも疑を容れぬ。然るに十八賢傳の全然之を闕き、一言も説き及ばなかつたのは、或は其制作の時其傳記既に失はれ、徴すべき資料の存せなかつたが爲めかも知れぬ。果して然りとすれば十八賢傳の成れる亦晉時代を去ること頗る遠く、唐初辨正論制作(當時は尙多少據るべき資料の存したものと思はれるが)よりも更らに後れたることを證するものゝ如くである。(法琳は唐の貞觀十四年歳六十九を以て卒する)

最後に宗炳に就き一言して置く。宗炳は十八賢傳にも

又高僧傳等にも慧遠が始めて所謂白蓮社を結成せんとした時、既に劉遺民其他の諸士と共に廬山に居た如く記してあるが、これ亦果して事實であつたか否頗る疑はしい。宋書(卷九十三)によれば彼は元嘉二十年(十八高賢傳には元嘉二十四年とあるのは恐らく誤であらう)に卒し、時に年六十九とあるから、彼は寧康三年の生である。しかし宋書並びに南史(卷七十五)には

高祖(宋武帝)辟炳爲主簿、不起、問其故、答曰棲丘、谷三十餘年、高祖善其對、妙善琴書、精於言理、每遊山水、往輒忘歸、征西長史王敬弘每從之、未嘗不彌日也。乃下入廬山、就釋慧遠、考尋文義、

ともいふ。即ち宗炳は廬山に入る以前既に三十餘年も丘に棲み谷に飲んで居たとすれば、その慧遠に就き學んだのは其晩年で、義熙十年以後のことであつたに相違ない。彼は慧遠の没するや碑を寺門に立て、又嘗ては慧遠に親しく喪服經の講義を聽き、後雷次宗が自己の名を以て別に同經の義疏を著はすや、宗炳は書を寄せ之を嘲つて

昔與足下共於釋和上間、面受此義、今便題卷首稱雷氏乎、

といつたともあり、彼は慧遠に心服した一人であつたら、白蓮社の一員ではあつたらうが、其結成の初に居たものではない。

其他尙高賢傳に關しては議すべき點も少からず存するが、以上論じたところによつて其史的價值も略明らかとなつたと思ふから、今は一切之を省略に附することゝする。

附記 ③ 李龍眠の十八賢圖は、今續藏本の初にも載つて居り、同書の終には其圖の描かれた翌年に作られた李冲元なるものゝ記も附記せられて居る。之と同一の圖と讚とは元祿本廬山記の初にもあり、之には

廬山記十八賢圖讚 龍眠李无中冲元記
と署し、尙終には、

偶得此圖附於廬山記、以資好事雅觀。

と注する。勿論これは廬山記に本より存したのではなく、之を出版するに際し、便誼附刊したに過ぎないものである。

④ 陶淵明が廬山に上つたことは南史(卷七十五)にも「潛(淵

明)有脚疾、使一門生二兒舉籃「廬山に往つたとある。陳氏廬山記によれば「陶令醉石」なるものもあつたといふ。

陶令名潛、字元亮、或曰字淵明。義熙三年爲彭澤令、曰吾安能爲五斗米折腰於鄉里小兒、乃棄去、賦歸去來。∴所居栗里兩山間有大石、仰觀懸瀑、平廣可坐十餘人、元亮自放以酒、故名醉石。